

# 文頭とモダリティ

## － think と「思う」の違いをどう理解するか－

荻原 洋<sup>1</sup>

Sentence Initial Position and Modality : How could we understand the difference between *think* and *omou* (思う) ?

OGIHARA Hiroshi

E-mail: oghihara@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード: think, 思う, モダリティ, 文頭

Keywords: think, omou (思う), modality, sentence initial position

### はじめに

英語の発音に関する話でよく引き合いに出されるのが映画 *My Fair Lady* である。貴族で言語学を専門とする大学教授の Higgins が、ひょんなことから Audrey Hepburn 演じるロンドンの下町生まれで粗野で下品な言葉遣いの花売り娘 Eliza Doolittle に上品な話し方の特訓をすることになる。特訓は来る日も来る日も深夜、時には明け方まで及び、Eliza はついに “I can't. I can't.” と (イギリス英語の発音で) 悲痛な叫び声をあげる。その時 Higgins 教授は英語の素晴らしさを滔々と説いて聞かせる (ついでにアングロ・サクソンの優秀さも喧伝する)。それを聞いた Eliza は突然何か吹っ切れたかのように上品なイギリス標準英語を話し始める。その時の Higgins 教授のセリフが “I think she's got it. I think she's got it.” (2回繰り返す) である。

このシーンを初めて見た時、「え、目の前で起こったことなのに「私は～と思う」は変じゃないの。むしろストレートに “She's got it!” の方が感じが出るのに。I think は無い方が自然じゃないの？」と思った記憶がある。つまり、単純に日本語に置き換えて、I think がなければ「(やった,) 彼女はついに上品な話し方ができるようになった」なのに、I think をつけたばかりに「(やった,) 彼女はついに

上品な話し方ができるようになったと思う」となって、なんだか確信の程度が弱くなったような気がしたわけである。

このことの直接の説明にはならないが、英語の think と日本語の「思う」は意味合いが異なるという話はよく聞く。例えば、英語の I think は ‘I say this with some good reason’ という意味で、単に推測だけでも言える「(私は) 思う」とは違うのだ、というような言い方がされる。つまり、Higgins 教授の例でいえば、それまでの長く苦しい特訓の積み重ねがあったからこそ上品な話し方を修得できたのであり「私は十分な根拠をもって、She's got it. と言える」と言っているのだと理解できなくもない。

もちろん、日本語の「思う」にもそのような意味を含めて使うことは十分あるのだが<sup>1</sup>, やはり「思う」がつくと、断定の度合いが下がるように感じるのが普通であろう。(そうでなければ *My Fair Lady* のシーンにひっかかることもないはずである。)

発話における話し手の主観的な判断や感情はモダリティ (modality) と呼ばれ、客観的内容である命題内容 (propositional content) と区別されるが、think も「思う」もモダリティ表現であるという点では同じである。(中右, 1980) では両者の間にはどのような類似点があって、どのような相違点があるのだろうか。そもそもそのようなことを未だに問うこと自体、ピントがずれているのだろうか。モダリティ表現に関する事象を取り上げながら、改めて考

<sup>1</sup> 富山大学人間発達科学部

えてみたい。

## 1. モダリティとは

モダリティを厳密に定義するのは難しいが、最初にそのいくつかを見てみたい。(以下、引用においては、原文が「モダリティー」となっていればそのまま引用する。)

まず、安井(1989)は次のように説明している。

「モダリティーというのは、自らが述べていることが、どれだけの公算をもっているかということに関する話者の評価、査定を示すものであり、客観的な事実世界からの距離を示すものである。逆にいえば、モダリティーを示す表現を用いることによって、客観的な事実世界との距離が埋められ、モダリティーを含む発話全体は、現実世界の仲間入りができることになるのである。

文からモダリティーを除いた部分を、命題内容と呼ぶことにすると、モダリティーによって示されるのは、命題内容が、そのまま事実として承認されるというのではなく、命題内容の承認に但し書きがあるということである。もう少し細かにいうと、モダリティーというのは、命題内容と現実との関係を、話し手がどのような心の傾斜をもって捕えているかということである。心の傾斜というのは、例えば、現実と命題内容との距離がゼロであると考えているのか、いないのかということ、ゼロであると考えているのなら、モダリティーを含まない形が用いられ、ゼロでないと考えているなら、モダリティーを含む形が用いられ、その場合には、「確実なもの」として捕らえられているのか、「ありそうなこと」、「不可能ではないこと」、「不可能なこと」として捕らえているのかというようなことが問題となってくる。」(pp.149-150)

また、モダリティを表す言語形式は法の助動詞に限られるわけではなく、文の特定の場所に生ずると決まっているわけでもない、とも述べている。

次に、中右(1980)は、モダリティを「発話時という瞬間的現在における話し手の心的態度」と定義し、モダリティを表す言語形式の詳細な検討を行っている。以下に定義に関する箇所を引用する。

「発話(行為)としての文は、大きく分けて、2つの意味成分から成る。1つは、命題あるいは命題内容と呼んでよい部分であり、もう1つは、モダリティと呼んでよい部分である。つまり、文の意味内容は、つねに、命題(内容)とモダリティの2大成分から成るとするのである。

命題(内容)とは、話者が切り取った現実世界の状況(出来事、状態、行為、過程など)を叙述したものである。これは要するに、話者によって客体化された、したがって、話者の外側にあるとされる客観的世界を指示している。

それに対し、モダリティとは、発話時における話者の心的態度を叙述したものである。これは要するに、発話の時点においてのみ有効な、したがって、客体化しえない話者の内側の主観的世界を指示している。

その心的態度の赴く対象は、ときに聞き手であったり、ときに第三者であったりする。が、なかでも重要なのは、自ら切り取った現実の状況、つまり、命題内容に、話者の心的態度が赴く場合である。

モダリティは確かに、話者がある状況に対して示す心的態度である。そのことに相違はない。が、肝心な点は、それがあくまで、発話時における心的態度というところにある。

発話時というのは、定義上、瞬間的現在である。そうすると、モダリティというのは、瞬間的現在における話者の心的態度である。話者の心的態度ではあっても、持続的現在時、過去時、未来時におけるそれは、定義上、モダリティということはできない。」(pp.159-60)

さらに、この記述の少し後で、I think, I guess, I'm certain, It seemsなどが「英語において特に注目すべきモダリティ表現」として列挙され、日本語の「(わたしは)・・・と思う」、「(わたしの)察するところ」、「(わたしには)・・・のようにみえる」などが対比すべき表現であると述べられている。注意すべきは、モダリティは話し手の発話時における心的態度なので、think 自体がモダリティ表現なのではなく、あくまでI think がモダリティ表現であって、I thought や You think などはモダリティ表現とはみなされないということである<sup>2</sup>。

モダリティが発話時という瞬間的現在における話し手の心的態度のことであり、「現実と命題内容と

の距離がゼロであると・・・考えているのなら、モダリティを含まない形が用いられ(る)」(安井. 1989)のであれば、例えば、吉田 (1995. pp.20-22) のように、He has already come. と I think he has already come. があれば、前者では、話し手が「彼がすでに来ている」ことを知っていて、そのことを疑念の余地のない事実として述べているのに対し、後者では話し手が彼の到着を直接目撃して確認したのではなく、間接的な証拠を基にして彼の到着を推論している、とし、「I think という主節は補文に述べられている内容を弱める働きをしている」、「I think は一種の「婉曲表現」と言ってよい」、「I think などの表現が補文の内容を弱めるのが本来の機能だとすれば・・・」というように I think の働きについて説明を加えるのは極めて自然であろう。そしてこの感覚が My Fair Lady のシーンへの違和感に通じているのは明らかである。

しかし、英語の I think は日本語の「私は～思う」とはまた違う事情を抱えているのである。次節ではそのことを見ていきたい。

## 2. Neg-Raising に関する事象から分かること

I think というモダリティ表現において、しばしば注目されるのが、1 のような否定辞繰り上げ (Neg-Raising) と呼ばれる現象である<sup>3</sup>。

1. a. I think he has not come yet.  
b. I don't think he has come yet. (吉田. 1995)

一般に、この2つはほぼ同じ意味であり、a は断定的な響きを与えやすいため b の方が「好まれる」と言われているが (安井. 1982 など)、Swan (1980) は否定辞繰り上げをしないのは誤り (typical mistake) であると言い、例として \*I think you haven't met my wife. を挙げている。従って、好みといっても実際はかなり強い傾向であることが伺える。(例文のアステリスクは、その文の容認可能性がかなり低い、あるいは非文であることを示す。)

ただし、厳密に言えば、b には2つの意味があり、1つは今述べたように a とほぼ同じ意味、もう1つは見た目通りの意味、つまり not が think を否定している解釈の意味である。例えば、Quirk, et al. (1985) は (2.a) は (2.b) と (2.c) の2つの意

味を持つと言う。

2. a. I don't think it's a good idea.  
b. It's probably not a good idea.  
c. I don't THINK it's a good idea; I KNOW it is.

c の意味で a を言う場合は、think に強調 (文ストレス) が置かれることが分かる。従って、特別なストレスを与えない限り、通常は b のように解釈される。そのことは、a の付加疑問形が 3 のようになることから推察される。(c の意味に対応する付加疑問形は I don't think it's a good idea, do I? であるが、それは独り言に近いもので、モダリティの問題とは関連させにくいので、これ以上は触れない。)

3. I don't think it's a good idea, is it?

ではなぜ、わざわざ否定辞 not をその対象から遠ざけ、意味が分かりにくくなるようなことをするのだろうか。これにもいくつかの説明があるが、代表的なものは、否定的な内容をストレートに表現すると失礼になることがあるので、否定辞を遠ざけることによって婉曲的になることを狙った、というものである。ただしこれは、think という動詞の意味特性と否定辞が一般的に有する特性の両方があることで初めて成り立つものである。think の意味特性というのは、think は「思考作用がある」ということであるから、思考作用そのものがない状態というのは普通は想像しにくいいため、not が think を従えていても (つまり、not が think の前にあっても)、not が think そのものを否定するとは捉えにくいということである。また、I think は明確なモダリティ表現であるから、「モダリティ表現はあくまで蓋然性を査定するものであり、それは必ずプラスの値を持つものである」(つまり、don't think で not が think という行為を否定してしまうと、蓋然性の査定そのものが行われていないことになり、I think というモダリティ表現を使う意味が無いことになってしまう) という言い方をすることもできる。(安井. 1989 など)

また、否定辞の一般的特性というのは、「否定の概念は、その作用域 (scope) の中にある最も情動的

価値が高い要素と結び付く」というものである。以下は安井（1982）の例である。（語順が確立されている英語では、ある要素の影響を受けるもの（作用域）は、その要素の後、つまり右側になければならない。）

- 4. a. Don't speak aloud.  
（話をするなというのではない）
- b. Don't speak aloud here.  
（よそへ行ってならかまわないが）
- c. Don't speak aloud here now.  
（別の時ならかまわないが）
- d. Don't learn bad manners.  
（よい行儀なら身につけてほしい）
- e. She doesn't like ice cream that has nuts.  
（アイスクリームがきらいだというのではない）

つまり、「think そのものは否定の対象となりにくい」と「not は情動的価値が高いものと結びつきやすい」という2つの別個の事情から、否定辞繰り上げが行われても文の意味解釈に大きな支障は生じず、否定辞を遠ざけて婉曲感を出すという効果だけが残るという仕組みが成立しているのである。（否定辞が離れると婉曲感が出るのは、否定の作用域が広がり何が否定されているかが分かりにくくなるため、結果的にぼかしの表現として利用される（安井（編）. 1996. negative attraction の項）ということである。Quirk, et al. (1985) も、(2.a) に関して、この文に2つの意味が可能なのが、つまり否定の対象がぼやけていることが、I don't think it's a good idea. の方が I think it's not a good idea. より補文に対する negative force が弱いことの理由である、と述べている。）

ここまでの話をまとめるとおおよそ次のようになる。すなわち、I think はモダリティ表現であり、命題内容の断定性を弱めるというコミュニケーション上の対人配慮機能を有する。そして、その機能を損なわないよう、命題内容を否定する場合、否定の not を命題から切り離して I think の方へ移動し、I think と否定辞繰り上げの相乗の効果によって、対人配慮をより確実にしている、というのである。しかし、話はそう簡単ではないように思われる。というのは、モダリティ表現に否定辞が付いた場合、そ

れが現れうる位置がかなり限定されてくるといえることがあるからである。

例えば、否定辞の無い I think は、文頭だけでなく文中（文の中ほど）や文末におかれることも可能である<sup>4</sup>。（村田. 1982）

- 5. a. I think the door is closed.
- b. The door, I think, is closed.
- c. The door is closed, I think.

ところが、否定辞が加わった I don't think は、文中にも文末にも生じることはできない。

- 6. a. I don't think the door is closed.
- b. \*The door, I don't think, is closed.
- c. \*The door is closed, I don't think.
- d. (Cf.) The door isn't closed, I don't think.

(6.d) は二重に否定されているようにも見えるが、ある種の方言において (6.a) とほぼ同じ意味で用いられるものである。（安井（編）. 1987）

村田（1982）によれば、モダリティを示す述部（modal predicate）を構成する動詞は大きく非叙述動詞と叙述動詞に分けられ、非叙述動詞はさらに主張動詞と非主張動詞に分けられ、その主張動詞の中でも「弱い主張」を表す動詞だけが6のような振る舞いを示すという。同じ主張動詞でも「強い主張」を表す動詞の場合、(7.a) に示すように、文末に生じることが出来ないのに加え、(6.d) と同じパターンの (7.b) も許容されない<sup>5</sup>。

- 7. a. \*The earth is flat, I don't conclude.
- b. \*The earth isn't flat, I don't conclude.

また、否定辞が繰り上げられていない述部が文末に生じる場合でも、8に見られるように、動詞の意味の強弱によって容認度に差が生じるという。（村田. 1982）

- 8. a. The earth isn't flat, I conclude.
- b. ?The door isn't closed, I think.

これらを分かりやすいように整理したのが次の表である。（(7.A) と (7.B) は、上で例としては挙げ



てないが、対比のために入れてある。)

〈弱い主張の動詞〉

〈強い主張の動詞〉

(6.a) I don't think the door is closed.	(7.A) I don't conclude the earth is flat.
(6.b) *The door, I don't think, is closed.	(7.B) *The earth, I don't conclude, is flat.
(6.c) *The door is closed, I don't think.	(7.a) *The earth is flat, I don't conclude.
(6.d) The door isn't closed, I don't think.	(7.b) *The earth isn't flat, I don't conclude.
(8.b) (?)The door isn't closed, I think.	(8.a) The earth isn't flat, I conclude.

なお、(7.A) は think の場合と異なり、not は conclude を否定していると解釈するのが普通である。「～とは結論づけない」と「～では無いと結論づける」は明らかに異なるし、すぐ近くに not の対象となりうるものがあるのなら、そちらと関連づける方が自然だからである。例えば次の英文は、テニスの道具が良くなりすぎてゲームがつまらなくなった（サービスで決まることが多くなって、白熱するラリーが少なくなった）ということを書いた文章の中に出てくる一節である。（スウェーデンの IT UNIVERSITY OF GÖTEBORG の MA Thesis "Flow, Interaction Design and Contemporary Boredom"(2004) の本文に出てくるもので、著者は N. Makelberge。下線は筆者。)

Although I don't conclude that technological advancements are to blame for the decrease, I believe it has played a significant role. It seems like not only the players but also the audience are bored of the game because of the intensification. The racket doesn't play the game for you but the speeds in which the game is played with new composite rackets and high pressured gas balls has taken the easy relaxing fun out of tennis for the average exercising player.

道具の進歩がゲームをつまらなくさせたわけではない、と結論づけている（I conclude that technological advancements are not to blame...）のでないことは明らかであろう。

安井（編）（1987）は、(6.b) や (6.c) の容認可能性が下がることを「一般的には、主節の主張を挿入節などのコメント的表現が打ち消すような、つまり主節と挿入節の主張が正反対になるような文は許容されない (p.659)」と説明している。しかし、既に述べたように think という行為そのものが否定される状況は通常は極めて想定しにくいのであるから、「挿入節などのコメント的表現が打ち消すような」という、I don't think が成立しているかのような前提での説明は、本来おかしいのである。では、どう考えれば良いかというところ、「“思考作用がない (not think)” は普通無いので、I don't think の not は何か別のものを否定しなくてはいけないのだが、(6.b) や (6.c) の形ではそれを探すことがうまく出来ない。なぜそれがうまく出来ないかというところ、本来 not の右側にないといけないものがその位置に無いからである」とすれば良いのである。

(6.d) については、安井（編）（1987）に「主節において否定的な内容を主張するという心理状態にある話者が、コメントにもそれを余剰的に持ち込んだものと考えられる (p.659)」という説明がなされている。not の位置との関係で言えば、「本当なら I don't think の右側に not の対象となるものが無いため容認可能性が低くなるはずであるが、(6.d) の中の 2 つの not が否定という同じ方向（極）を向いているため、共鳴しやすく、問題の not が対象を見つけているかのような感じを（このタイプを許す話者は）持つのであろう」という説明になるだろうか。

さらに (8.b) については、主節でかなり強い主張（否定的内容）を述べておいて、直後にその主張を弱めるような表現を挿入的に付け足すことは、いかにも不自然な行為である、と（常識的に）説明できる。

次に、対比表の右側の conclude の例であるが、conclude では not は conclude そのものを否定するので、think の場合とは違う説明の仕方が必要である。というより、むしろ、説明の仕方が違わなくてはおかしい。そして、これらについては安井（編）（1987）の「主節の主張を挿入節などのコメント的表現が打ち消すような・・・文は許容されない」がぴったりの説明の仕方となる。(7.B) と (7.a) はそれで問題なく納得できる。また (7.b) では、not は conclude を否定していてそこで完結しているのだから（つまり、(6.d) とパラレルの解釈はもとも

と無いのだから), 主節の内容が肯定であろうと否定であろうと関係なく, (7.B) や (7.a) と同じ理由で許容されない。さらに, (8.a) は, conclude は think より強い主張なので, 挿入的に付け足すことも不自然にはならない, と納得できるであろう。

このように, 対比表の容認可能性の度合いの違いは, 語彙の意味特性 (think と conclude の違い) と否定辞とその作用域に関する英語の決まり事 (否定辞の作用域は否定辞の後になければならない) の2つで, 十分説明できることが分かる。

この「否定辞はその作用域の前になければならない」ということに関して言えば, 上記の対比表からも分かるように, 否定辞が前の方であればあるほど, 都合が良いことが分かる。多少離れていても情報的価値が高ければそこと結びつくし, また, 距離を利用してばかりの効果も添えることもできる。とはいえ, 否定というのは, 有ると無いとで 180 度話が 바뀌ってくる, 非常に大きな影響力を持つものなので, それが (具体的に何を否定するかということとは別に) 文の最初の方にあるということは, コミュニケーションのスタイル的に大きな意味を持つ。その点について, 例えば, 前出の安井 (編) (1996. negative attraction の項) には, 「否定辞をなるべく前に出すことで否定文であることを早めに知らせ, 聞き手の負担を軽くしようという話し手の側の配慮がある」という説明がある。否定辞の影響力は非常に大きいので, そういう重要な情報を先に出すことで, 聞き手にメッセージをより効率的に受信・理解するためのガイドライン・枠組を与えているのである, ということなのである。

しかし, それは同時に逆の意味も持つ。メッセージ理解のガイドラインを与えるということは, 聞き手を話し手の土俵に引き込んでいるとも言えるからである。そしてそれは, 語順が確立されている英語においては, 否定辞に限らず, 文の最初の方に生じる全ての要素が持ちうる力なのであり, 本論で考察の対象としてきた I think についても, それは例外ではない。そのことを感じさせてくれるのが, I think のイントネーションである。以下は, 中学校用検定教科書 New Horizon (東京書籍, 2006 年版) の 2 年生用教科書にある例で, 教師用のイントネーションの指示では I think の I のところを強く・高く読むようになっている<sup>6</sup>。(下線は筆者。)

#### ○ Unit 5 : A Park or a Parking Area?

遊んでいた子どもが倒れてきた自転車で怪我をしたことを知って

Emi : Too many people park their bikes there.

Mike : I think we need another parking area.

Emi : I think so, too.

(いずれの I think でも I が強く発音される)

#### ○ Unit 7 : My Favorite Movie, Multi Plus 4 わたしの好きなこと・もの

Step 1 モデル文

I like to play video games. I think Egg Monsters is the best. There are many cute characters in it.

(I like と I think 両方の I が強く発音される)

#### ○ Further Reading : 英語劇 人形館

Chris が人形たちと話をしている (以下の会話で Chris 以外は全て人形)

Patch: Do you want to live with us here?

Chris: Oh, yes. Thank you! You look so happy. And I think you're free.

Patch: We have to say yes and no.

Chris: What do you mean?

(中略)

Chop: Dancing isn't fun for us. It's work!

Patch: I think going to school is more interesting than dancing.

Pitch: You can learn many new things at school. You can read many books.

Pan: Do you really want to be a puppet like us? Do you really think we're free?

(いずれの I think でも I が強く発音される)

イントネーションは基本的には主観的なものであり, 教科書にある教師用の指示であっても必ずしもそれだけが正しいわけではない。またイントネーションはその時々環境 (対話相手の反応とか) によっても大きく変化する。上の例のいずれにおいても, (文脈を十分理解しているとして) 当該の I を強く読まなくてもそれほど問題では無いように感じる。

しかし, だからこそ, I think のような, 日本人的感觉ではそれほど重要ではないような表現の, な

おかつ普段あまり強く読まれることのない主格代名詞のIが、強く読まれるべきだと指示されていることは、やはりこのモダリティ表現が文頭で大きな力を持って存在していることを示唆している。安井(1989)は、「モダリティーを担う要素に特定の音調が付くと、さらにモダリティーの意味が強められることから、モダリティーの働きをもつ音調は、モダリティー表現の階層の中で最も上位にあるものであるかもしれない (p.153)」と述べているが、文頭のI thinkのIが強調されて発音されるということは、かなり強い調子で話し手が聞き手を自らの土俵に引っ張り込んでいるということなのである。

このような理解の上で、再度 My Fair Lady に登場する I think she's got it. を眺めると、少し違った感じ方も可能になるだろう。つまり、「I think は発話時における話し手の心的態度を示すもので、表現の断定性を緩和するというコミュニケーション上の対人配慮機能があり・・・」という説明ではなく、「モダリティ表現は話し手の心的態度を表すものであるが、それが文の始めに来ている場合は、この後続く部分は話し手の思いという枠（世界）の中で全て受入れよという、極めて強いメッセージを送っていることになる」というところであろうか。もう少しことばを足せば、モダリティ表現が付随していない発話は、話し手の主観が加わっていない分だけ断定性が高いとも言える一方で、文の始まりという極めて強い力を持つポジションに話し手の主観・思いが置かれることによって、その主観・思いは通常よりもかなり大きく増幅され、モダリティを加えずに淡々と命題を述べることよりはるかに強いメッセージを送ることになる、とも言えるのである。

### 3. 日本語母語話者にとってのI think

前節では、「文頭のI think」がかなり強い表現であることを見てきた。また、その強さは、英語における文頭という強力な位置に話し手の主観が据えられることから生まれてくるのではないかと考えてきた。しかし、このことは日本語を母語とする日本人英語学習者にはかなり理解しにくい、あるいは納得しにくいものである。というのは、非常に大雑把な言い方をすれば、日本語の「主語を明示しない」「否定辞は文の最後」「動詞（「思う」など）も文の最後」などの特徴が、英語の文頭のI thinkやI don't

thinkに強力な力を与えている要素のほとんどと相反するものだからである。つまり、I thinkで文を始める（時にはIを強く読むこともある）英語と、文の終わりに（そっと）「～と思う」を付け加える日本語とは、かなり異なるコミュニケーションを行っているのである。にもかかわらず、現実には「(I) think = 思う」の図式に引っぱられ過ぎて「I thinkは婉曲的表現」と述べるにとどまってしまっている場合が多い<sup>7</sup>。そしてそういった意識のままI thinkを使うことを体に覚えさせてしまっている。例えば、先に引用した中学校用検定教科書（2年生用）で見ると、I thinkの使用場面の設定はかなり特徴的である。（英文のイタリック・太字・下線は原文のまま。）

#### ○ Unit 5 : A Park or a Parking Area?

基本文 : I **think** (**that**) we need a parking area.

Your Turn : 下線部を自由に入れ替え対話する

A: I think English is important. What do you think?

B: I think so, too. / I don't think so.

（下線部と入れ替える例）

We need computers at school.

Soccer is an exciting sport.

Comics are good for children.

#### ○ Unit 7 : My Favorite Movie

本文 : Which is stronger, Godzilla or King Kong? I think Godzilla is stronger than King Kong. Godzilla is the strongest of all monsters.

基本文 : This movie is more interesting than that one. / This movie is the most interesting this year.

Your Turn : 下線部を自由に入れ替え対話する  
（できれば形容詞も替えてみる）

A: I think soccer is a very exciting sport.

B: I think so, too. I think soccer is the most exciting sport. [I don't think so. I think baseball is more exciting.]

Let's Chat 3 : 賛成・反対のしかた  
対話文（モデル）

Ken : Who do you like better, Jun or Teru?

Kate : I like Teru. He's a better singer than

Jun.

Ken : I agree, but he's not as cool as Jun.

Kate : I disagree. Teru is the coolest.

練習 : ( ) 内に歌手名を入れて対話する

A: I think (歌手名) is a better signer than (別の歌手名).

B: I agree. [I think so, too.] / I disagree.

[I don't think so.]

これらに共通して見られるのは、「I think を使った、極めてシンプルな自分の好みの言い合い」である。もちろん、外国語の学習は積み上げであり、最初から複雑なやりとりは出来ないし、また無理やりさせるべきものでもない。実際、同じ教科書でも3年生になると、I think を使った後に理由を付け加えるやりとりのパターンが出てくる。しかし、最初についた癖はなかなか抜けないのが外国語学習の常である。上記のような単純なパターン・プラクティスでは、自分の好みを一方的に言い合うだけで、なぜそう思うのかといった、強い I think に必要な根拠にまで対話が繋がっていくことは不可能である。これをやりすぎると（パターン・プラクティスなので、ある意味「やりすぎ」になるのが狙い・目標なのだが）、学習者によっては「I think をつければ、好き勝手なことを言えるんだな」ぐらいの感覚を持ってしまう可能性すらある。その点で、can の持つ強い（時として傲慢な）響きを無視して I can ～を繰り返し言わせる練習とよく似ている。日本人が英語をコミュニケーション・ツールとして身に付けようとするなら、このようなパターン・プラクティスの功罪について、一度まじめに考えてみる必要があるだろう。（上記 Unit 5 の教材が載っているページでは、教師向けの指示も入れると、この1ページだけで、I think (I think so, I don't think so も含む) が、「これでもか」と言わんばかりに、18回も出てきており、表現の軽さ（軽い表現としての扱い）を感じずにはいられない。）

このようにして形成された習慣は、大学生になってもしっかり生きている。次の英文は、著者が担当する授業で大学2年生が書いたものである。（下線は筆者による。）課題は「日本の大学で学ぶ外国人留学生のスピーチを聴いて（実際には書かれた英文を読む）、その感想を留学生に向かって話すつもりで、英語の文章を書きなさい」である。スピーチの

内容は、日本人は旅行する時に有名な観光地にしか興味が無いようだ。そういうところはどこも混んでいて、土産物屋がやかましく、ごみも散らかっている。その旅行者にとって初めて見るもの、体験するものがあれば、そこが有名な観光地でなくても、十分満足できるのに、というものである。

I think tourism is a good way to enjoy for every person. They go to places where they want to go, they are impressed by what they see there. I think it is the most important thing.

I think that they are happy just by seeing what I am impressed by. When I recommend tourist spots to people, I think that it is best to recommend places and things that I was moved by.

One of the good things about sightseeing is to share emotions. By sharing emotions, I know other people's ideas and I think that we will get along better. I think that everyone will be happy.

この文章は10の文から成っているが（重文は2文とカウント）、そのうち実に6つが I think で始まっている。そのほとんどが非常に主観的な内容を述べたものであり、このような感想を言われた留学生は内心辟易としてしまうかもしれない。相当押し出しの強い感想である。ただし、この英文を書いた学生は、そのような強引さを自分でも感じて、それとらげるために I think を多用したのかもしれない。それはそれで相手への配慮を忘れないという褒められる面もあるのだが、I think を安易に使う習慣が身についていることもあって、その思案が悪い結果をもたらしてしまったという、現実のコミュニケーションではできる限り避けたい状況を生んでしまっているのである。もちろん、全ての作文がこのようなものということではない。ただ、日本人大学生の書く英語の文章に I think の登場回数が思いのほか多いのには驚かされる。（余談だが、「次回の作文から I think は使用禁止」というのは、やってみる価値があるだろう。）

#### 4. まとめ

I think も「(私は) 思う」も、発話時点での話し



手の心的状態を示すモダリティ表現であるという点では同じである。ただし、文中での位置が違う。英語では文頭という位置に非常に大きな力（その後の発話の方向付けをする力）を与えており、そこに主観的判断が置かれると、それが増幅されかなり強いメッセージとなる。つまり、モダリティという「発話のその瞬間における話し手の心的状態」でさえ、英語の語順という仕組みが振るう強大なパワーの影響からは逃れられないのである<sup>8</sup>。

同じことが否定辞についても言える。否定辞をできるだけ文の前の方に置くのは聞き手への配慮と言えるのかもしれないが、それは聞き手を話し手の、いわば土俵の中に引き込もうとする話し手側の戦略とも言えるのである。それが結果的に、メッセージの意味や意図を聞き手に早く理解・受容させることにつながるのである。

この「英語という言語で文頭というポジションが持つ力」を常に頭に入れておくことは、日本人が英語を学ぶ際に非常に大切なことと思われる。「I think = (私は) 思う」という単純な覚え方では、そこを理解できないまま学習が進んでしまう。「相手がI thinkと話し始めたら、要注意だぞ」ぐらいの一言(Tip)が会話のテキストにあっても良いのかもしれない。英語の(文頭の)I thinkは意外と強面(こわもて)なのである<sup>9</sup>。

## 参考文献

- 安藤貞雄. 1985. 続・英語教師の文法研究. 大修館.  
村田勇三郎. 1982. 機能英文法. 大修館.  
中右 実. 1980. 「文副詞の比較」. 國廣哲彌(編) 日英語比較講座第2巻: 文法. 大修館.  
中右 実. 1994. 認知意味論の原理. 大修館.  
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman.  
柴田 武(他). 1979. ことばの意味2 - 辞書に書いてないこと. 平凡社.  
Swan, M. 1980. Practical English Usage. Oxford Univ. Press.  
安井 稔. 1982. 英文法総覧. 開拓社.  
安井 稔(編). 1987. [例解] 現代英文法辞典. 大修館  
安井 稔. 1989. 英文法を洗う. 研究社.

- 安井 稔(編). 1996. コンサイス英文法辞典. 三省堂.  
吉田正治. 1995. 英語教師のための英文法. 研究社.

## 注

1. 英語の think は「思う」というより「考える」に近いという人もいる。例えば、「日本語と英語をつなぐ」というブログ (<https://je.at.webry.info>) の中の「think は「思う」? I think I want to (?)」という記事 (2012年11月2日付, カテゴリーは「英語学習」) で, 著者のすずきひろし氏 (大人向けの英語教室を開催したり英語学習の書籍を多数出版している英語の先生) は, 広辞苑の「思う」の定義や英英辞典 (辞典名は示されていない) の think の定義と実際の用例を引用しながら, 日本語の「思う」はたいていの場合は「= think」とは言えず, また think はたいていの場合日本語の「考える」に相当するのではないかと述べている。

柴田 武(他)(1979)では, 日本語の「思う」と「考える」の意味の違いが次のように示されており, このブログの著者のような感覚は十分頷けるものであろう。

オモウ: <心の中で> <ある対象のイメージ(感覚・情緒)を意識する> <直観的・情緒的>

カンガエル: <頭の中で> <ある対象について知力を働かせる> <過程的・論理的>

2. 中右(1994)には次のような記述がみられる。「発話時点と瞬間同時に発現する心的態度のうちで, 話し手にとって接触可能な情報となりうるのは, ただひとつ, 話し手自身の心的態度だけである」(p.51)

「モダリティは主観的磁場を形成するのに対し, 命題内容は客観的磁場を形成する。(中略) その分岐点は話し手の現在, つまり瞬間的現在時としての発話時点である。この意味で発話時点にしか帰属しえない情報だけが, 話し手の主観的領域内にあるのに対し, 発話時点以前に帰属しうる情報は, あらかじめ客体化された情報として, 客観領域内にあると把握される。命題内容の客観性は, 話し手がその命題内容を, 発話時点に先立って入手可能な情報からなるものとして提示しているところに起因するのに対し, モダリティの主観性は, 話し手が発話時点と瞬間同時に発現するみずからの心的態度を, 客体化の心的過程を経るとま

もなく、生のまま自己表出しているところに起因するのである。」(p.52)

「文の意味内容はモダリティと命題内容の二極構造からなる。モダリティの極は主観的意味領域なのに対し、命題内容の極は客観的意味領域である。モダリティを一般的に定義して〈発話時点における話し手の心的態度〉としたが、モダリティの主観性は、発話時点を瞬間的現在時として解釈するところに求められる。瞬間的現在時を分岐点として、情報は主観の極と客観の極に切り分けられる。あらゆる可能な情報のなかで、発話時点と同時的に発現する話し手の心的態度だけが主観領域の情報を形づることができる。」(p.53)

また、そこで提案されている階層意味論の枠組みの中では、モダリティはさらに全体命題(中立命題に極性・ポラリティが加わったもの)を作用域とする文内モダリティと、その文内モダリティをも含む「文内モダリティ+全体命題」を作用域とする談話モダリティとに分けられている。I think は文内モダリティであり、frankly, to tell the truth, in short などが談話モダリティに分類される。

3. 否定辞繰り上げという名称を用いていても、実際に否定辞が統語上の操作によって補文から主節に移動したと考えている研究者は少なく、分かりやすい名称ということで用いていることが多い。
4. ただし、\*He will come here today, I know. のように、全てのモダリティ表現が、このパターンを許すわけではない。村田(1982)参照。
5. 否定辞繰り上げを許す動詞の特徴及びそれに関する諸説については、安井(編)(1996)を参照。
6. 2年生用教科書では、I を強く読むよう指示されているのはこの3か所だけであった。もちろん、録音データで確かめればこれ以外にもある可能性はある。
7. 注1で引用したブログの同じ記事では、I think I want to という表現はかなり限られたコンテキストでしか用いられないということが報告されている。そして、英和辞典には want to の意味を「したいと思う」としているものもあり、I think I want to は「思う」が重複している感じになるので、単純に日本語の表現を基に「~したいと思う」と言いたい場合は I think は付けない方が良いでしょう、と述べている。(ちなみに、I

think I want to が使われるのは、その後に die / have his baby / change my career のようなかなり深刻な事柄が来る場合がほとんどで、I want の前にさらに I think を加えるのは「あれこれ考えた末」という感じになるのだろう、と述べている。実際本小論の筆者が Google で検索しても、似たような表現が続く場合が多かった。)

I think I want to が一般的でないのは「思う」重複しているからなのだ、というのは、確かに頷ける部分もある。ただ、本論で見てきたような説明の仕方も十分可能であろう。つまり、この表現は、文の最初に I think と言って「この後の話は私の強い思いということで理解して下さいよ」と聞き手に釘を刺したうえでさらに I want と自分の要求をぶつけるという、相手にとってはかなり横暴な、あるいはくどい物言いと聞こえるので、よほどのことでないと使いにくいのではないか、というふうに考えるのである。日本語の「思う」には英語の(文の最初にくる) I think のような強い力はないので、「~したいと思う」は十分丁寧な表現としかならず、問題にはならないのである。

8. 日本語の「私が思うに」(文頭)、「私は~と思う」(最初と最後に分離)、「~と私は思う」(文末)の違いについても考えてみる必要があることは言うまでもない。
9. 2節で、Swan(1980)では否定辞繰り上げがなされていない文にアスタリスクが付けられていることを紹介したが、実際には否定辞繰り上げがなされなくても、ちょっと特別な意味合いの文と理解されるだけで、すぐに容認可能性が極端に低くなったり非文になったりするわけではない。しかし、この本のタイトルが Practical English Usage となっていることから分かるように、確かにこのアスタリスクは実用的かつ大変親切な「アドバイス」なのである。

(2018年10月18日受付)

(2018年12月19日受理)